



2010. 5. 31

No.161

編集 樋口 みな子

E-mail minginga@agate.plala.or.jp
<http://briefcase.yahoo.co.jp/bc/ginganews150>
郵便振替「銀河通信」
02740-7-56535
(郵送6号分1,000円)

野幌から初夏の便りです。



5.31 我が家のスズラン

3月の発行から早2ヶ月が過ぎました。皆様はお元気でお過ごしでしたか？なかなか暖かくならず5月に入ってから暖房が必要な日もありました。

私は父のいる病院、山、山岳会や自然保護の会議に飛び回りながら、なんとか元気に過ごしています。家族は今日は何の会議？とあきれながら協力してくれます。「ありがとう」と感謝の気持ちを言葉にするようにしていますが本当は自宅でゆったりして欲しいようです。父はあちこちの病院を転院せざるを得ませんでした。1月に自宅から割と近くの療養型病院に移りました。老いは進みましたが、簡単なリハビリもしながら落ち着いて療養しています。



5.30 七ッ岳稜線からの大沼

ようやく初夏らしくなり、遅れていた春の花が一斉に咲き始めました。先日、道南では遅咲きの桜が咲いていましたし、カタクリも5月中旬までみることができました。庭ののスズランが風に揺れて今にも一斉に鈴の音が聞こえてくるようです。母が植えてくれた花ですが、生まれた日高を思い出す大好きな花です。

友人と神恵内の両古美山に登った後、積丹半島の突端の岬の湯に行きました。日本海に沈む夕日が美しいと評判の温泉です。5歳の頃住んでいた野塚を通りました。ふいに、バイクに乗った父の背中にくっついて釣りに行ったことを思い出しました。夕日を浴びながら美しい海岸線をバイクを走らす若き日の父の姿が目についたのです。後日、父のいる病院を訪ねた時にその話をしました。声は出ないけれど、そうかと頷いたように見えました。先日読んだ本にも、ひとつの風景から過去の自分が現れると書いてありました。いくつになっても子どもの頃に見た原風景は忘れないし、何かの拍子に思い出すものですね。私は父の転勤でずいぶんいろんな土地で暮らしましたが、忘れられない風景をたくさん持

てて良かったなと思います。短い年月しか過ごさなかった土地は、いつも見ている当たり前の風景ではなかったから、今、ささやかでも自然を大事にしたいと活動する原点になっている気がします。

今回の通信はかなり焦りました。日頃から読んだ本や映画などきちんと記録していないので、その整理に時間がかかりました。その上、5月はやたら行事が多くて、ゆっくり机に向かう時間がありま

せんでした。

発行が遅れてごめんなさい。懲りずに最後までお読み頂けたら嬉しいです。

上から2番目の写真・道南の七ッ岳ではチシマザクラが咲いていました。



七ッ岳のエゾイチゲ



5.30 七ッ岳から望む大千軒岳連峰

みな子の山旅日記

今年は雪解けが遅く、山スキー、スノーシュー、つぼ足で春山を十分に楽しみました。全部は紹介しきれないと思いますが列記します。
4月17日～18日羊蹄山、山スキー4月22日利根別自然休養林、夏山装備4月26日日本倶登山、スノーシュー4月30日～5月3日利尻山、山スキー 5月6日両古美山、つぼ足5月22日群別岳、つぼ足5月30日七ツ岳、夏山装備

羊蹄山のとっぺんから滑ろう!



4. 17京極山荘前でスノータワー競技



NZ人、アメリカ人など国際色豊かな参加者

札幌山の会は毎年羊蹄山のとっぺんから滑ろう」を会員以外の人たちを対象に開いています。4月17日、京極山荘に会員15人、会員外14人が参加しスノータワー競技やアイスキャンドル作りに取り組みました。夜はそれぞれに自己紹介し交流会。若い女性や、NZ人のガイドなどたくさんの参加で盛り上がりしました。

18日、うす曇り。視界は良好ですが気温は低め。2班に分かれて7:30に羊蹄山頂上を目指して出発。私は後続隊。それでも1400mまで行けたのが嬉しかったです。アイスバーンなので慎重に下り、そこからは転びながらも快適に滑降しました。私のグループで、足がかなり疲れている人もいました。長い距離ですので、お互いに助け合って下山。安全第一で楽しみました。

スノーボードを担いで登った若い女性、華麗に滑りおりに感心しました。スキーはまだまだ下手ですが、昨年よりは進歩したように思います。



560m地点で

快晴の利尻山

海に浮かび上がるようにすっきりとした秀峰利尻山が今も鮮やかに目に焼き付いています。

利尻山からの大滑降に挑む仲間が悪天続きで日程がずれて3度目に挑戦。今度こそはと意気込むメンバーを応援



鴛泊港からの利尻山

しようと急遽、サポート隊も利尻山の途中まで行くことになりました。

慌てて、4月30日大きなザックにパッキングし 車2台で稚内へ。本隊4人、応援隊4人です。 稚内山岳会のルームにお世話になり、1日の早朝6:50のフェリーで鴛泊港へ。本隊はそのまま山に入るのでキャンプ場までタクシーを利用しました。私たちはロッジにザックやスキーを置き、ペン岬まで散歩。ここからの展望が素晴らしかったです。長く裾をひいた利尻山が美しい。礼文も見えました。ロッジはGWにしては静かで、室内は清潔で快適でした。

2日もピーカン。ロッジを7:10出発。ここからが登山口までが遠い、遠い。何せ、スキー靴を履いての車道歩き。スキーがずっしりと重い。30分ぐらいと思っていたら1時間も歩くとは……。

スキーを装着し、登山口を8:20出発。つぼ足で先行する人たち、前日の私たちの仲間4人、他の登山者のスキーのシールを辿って進みます。甘露水の右にいけます。エゾマツ、トドマツの森がしばらく続き視界はよくありません。でも野鳥のさえずりがずっと私たちを励ますようにさえずって、気持ちの良い歩きです。1時間半歩いたら視界が突然開け、広い台地に出ました。利尻山が圧巻。ここで大休止し、さらに本隊のテント場に向いました。コルのテント場から、さらに急登を登った地点750mに到着。10:50、ここから広い台地に向かって滑降。重い雪で、何度か足をとられ転倒しながらも快適にスキーを楽しみました。登山口12:10

本隊も頂上に立ち、大滑降を十分に楽しんだとのこと。その夜の宴会は大いに盛り上がりしました。

行動記録

4/30日 19:00 札幌発—(道央道・深川留萌道・国道232号経由)—
5/1日 1:00 稚内港着 6:50 発—(フェリー)—8:40 鴛泊着 鴛泊市内散策 ペン岬 北麓キャンプ場泊5/2日 7:10 8:20 北麓キャンプ場・・・10:50 750m行動限界・・・12:10 北麓キャンプ場 5/3日 8:00 北麓キャンプ場・・・9:00 鴛泊発(フェリー) 10:50 稚内港着—17:30 札幌着



ペン岬から礼文を望む



4. 30稚内山岳会のルームに泊めて頂きました。

眺望の山、両古美山と当丸山

5月6日に、神恵内の両古美山と当丸山に3人で登りました。雪の状態が分からなかったので、スノーシューを持って行きましたが、頂上までザックにくくりつけたまま、つぼ足で登りました。

当丸峠のシェルタの左側の小さなコブに向かって登って行きます。泥の木山という変わった名前の山が右手に見えて迫力があります。頂上まではゆるやかな登りで1時間半。



白く輝く余別岳と積丹岳 2010/05/06



後方は当丸山

標識は無惨に破壊されていて、クマの仕業かと、ちょっと怖かったです。その標識を少し進むと広い台地に出ました。11時。真っ白な余別岳と積丹岳が望め、360度の眺望に大満足しました。11時半に下山開始でトンネルには12:20でした。

右手に見える当丸山には、スノーシューを小屋前に置いて12:30、急斜面を登ると夏道につながり可愛いカタクリがようやく咲き始めていました。雪解けが遅いですね。頂上には13:15 800m足らずの山なのに高度感があり、展望が素晴らしかったです。当丸沼がぼっかりと浮かび、白く輝く山とのコントラストが美しい。駐車地点には14:00でした。

他の山行記録は8ページに載せました

憧れの鋭鋒、群別岳



5月22日、今年最初のJAC支部山行は群別岳です。リーダーは毎年必ずこの時期に群別岳に登っているNさん。地元Mさんから林道情報をもらい同行していただきました。

今回のメンバーは13人です。私は昨年、友人と5人で浜益岳林道から登り、幌天狗から群別岳を目指しましたがナイブリッジで雪崩の危険を感じ途中で撤退しました。



熊の平から群別岳を望む



撮影・今田美知子さん

じ途中で撤退しました。

早朝5時、浜益コミュニティセンター前に集合。曇り空でしたがどんどん雲が切れて青空になりました。群別川にかかる群別橋手前の林道は四駆3台に乗り換えて進むも、でこぼこの悪路で道幅は狭く緊張しました。雪が深いため2km手前で車を置き、5:50雪がまだたっぷりの林道を、長靴で歩き始めました。エゾノリュウキンカが咲き始めたばかり。遅い春の訪れです。林道終点まで20分でした。

そこからかなり増量している群別川を渡渉。急斜面を登りきった場所で登山靴に替えて50分。いくつもの沢が発達して複雑な地形です。気持ちのいい広い台地が熊の平です。ここから群別岳が鋭く天を突いた姿と優美な幌天狗がくっきりと望め、皆はカメラで雄姿を納めたり、記念撮影したりと目指す頂上に、ますます登行意欲をかきたてられました。気温はぐんぐんとあがり、増田の沢(牧の滝)では豪快な沢しぶきが一服の清涼剤でした。

滝の右から急な斜面をアイゼンをつけてのつらい登りが続きますが、皆、健脚揃い。私もなんとか付いて行くことが出来ました。リーダー、地元のMさんは、適切な場所で休憩をとるので、また元気を取り戻しては登りました。尾根取り付き手前の藪こぎでは、行者ニンニクの宝庫。白くて太い、原始の香りが藪中に漂っていました。夢中になりすぎた人もいるほど。尾根の取り付きからの急登はアイゼンを装着して慎重に進むと20分で頂上でした。雪は締まっており登りやすかったです。

狭い頂上でしたが、浜益岳、雄冬岳、尾白利加岳、黄金山、南暑寒別岳、暑寒別岳など360度の眺望に、疲れも吹き飛ばすほどの感激でした。昨年果たせなかった群別岳。ようやく達成でき、Aさん持参の雪で冷やされたビールが格別美味しい。帰りは尾根取り付きからは左に進みます。広い台地を下り、後ろを振り返ると、写真でよく見るヨーロッパアルプスのような大きな岩と雪原で、懐の大きな山を満喫しました。増田の沢を通り下山。15:55丁度10時間の長い山行を終えました。

駐車地点出発5:50 林道終点6:10 渡渉6:30 熊の平7:20 大休止 増田の沢8:50 群別・幌天のコル10:10 南峰の岩稜下10:35 尾根取り付き11:15 ここで行者ニンニクを採っている仲間をしばらく待つ 群別岳頂上12:00 下山開始12:40 駐車地点15:55

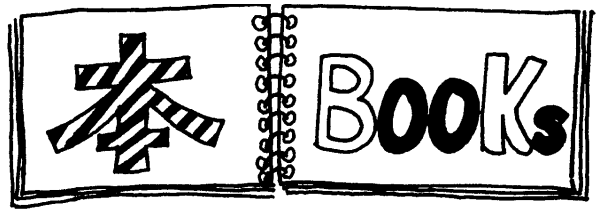


撮影・増田光雄さん

2010 5 22



「ヒグマとつきあう」
ヒトとキムンカムイの関係学
ヒグマの会編 1400円
販売 エコ・ネットワーク



ヒグマと人間の共生のあり方を考え、生息環境の保全に関心を持ってもらいたいという願いと期待をこめて発刊されました。

ヒグマの会は北大ヒグマ研究グループ（クマ研）や、ヒグマに関心を持つ道民、農業者ハンターなどが集まって発足。30年間の活動の成果をまとめたのが本書です。

ヒグマと人間が共生できる社会を目指し、毎年、さまざまなテーマでヒグマフォーラムを開催してきました。

ヒグマ研究最前線の章では、クマ研が5つのフィールド、天塩、大雪、道南、知床、浦幌での調査によってヒグマの生態を明らかにしています。新聞紙上でも話題になったトラジロウ。電波追跡調査で樽前山の森と日高の森を自由に行き交っていたことが分かりました。学生たちが、地元の支援を受けながらヒグマの生態に迫る地道な調査が圧巻。1年間に100人以上の狩猟者に会って、捕獲個体調査をした間野さん。彼は狩猟者から借りた頭蓋をクリーニングして返却しましたが、「北大に貸すとピカピカになって戻ると評判になり協力者が増えたというエピソードなどが満載。

ある研究者はドラム缶ワナを考案。捕まえたクマに発信器をつけて行動追跡から浮かび上がってきたのは、海岸や山すそに投棄された水産廃棄物をあさる餌付けされたクマの存在でした。この章だけでも1冊の本になると思えるほど、多彩な調査結果に目が見開かれ、感動しました。

知床のサケ定置網番屋では、漁師たちとヒグマが互いに無視しあい、食物やゴミの管理を徹底することで、奇跡のような共存を実現させました。口絵にそんな場面を捉えた写真があり驚きました。

日本山岳会で分水嶺踏査に取り組んでいた05年5月の連休、道北のペンケ山を目指して進んでいた時、ペンケ山の北尾根から、今かけ下りたばかりの親子クマの真新しい大きな足跡を発見。笛を吹いて私たちの存在を知らせながら突破したことを思い出しました。

クマがいれば現場から遠ざかる。移動するときは慌てず、仲間と離れないで行動することが大事だとあります。

事件・事故・騒動を検証するの章では、現・苫前町で起きたヒグマ襲撃事件（1915年）や大学生の山岳パーティが縦走中にヒグマに追われ3人が死亡した日高山系事故（70年）等、関係者への聞き取り調査をして検証。ヒグマに食べ物があると学習させない気配りが必要と訴えます。

ヒグマの会30年の歩みの章ではさまざまな分野で活躍する25人の文章が面白かったです。どの文章からもヒグマから学び、共に生きる道を考えようとしていて共感しました。

ヒグマの会の歩みと当時の関連した出来事の年表も掲載しています。

販売はエコ・ネットワーク TEL011-737-7841 011-737-9606 E-mail eco@hokkai.or.jp

「よみがえれ知床」 100平方メートル運動の夢

辰濃和男編著 関根郁雄 深沢 博 朝日選書 740円

「知床100平方メートル運動」開始から33年。その運動の歴史をたどり、100年後の未来を探ります。

「知床で夢を買いませんか」1979年10月の天声人語は私の記憶にも残っています。当時私も旭川で「大雪と石狩の自然を守る会」で活動していましたから知床の運動も身近にありました。現地で牛来さん（当時は町議）の知床を守りたいとの私の胸にも迫るような熱弁を聴いたことを思い出しました。

100平方メートル運動は1977年、一区画8000円を全国からの人々が出し合って離農地を森によみがえらせるという当時の藤谷町長の構想で始まりました。最初は上手くいくのか？と役場内でも確信はもてずにいた職員も多かったそうです。天声人語で紹介されると全国から問い合わせが殺到したとあります。書いた記者が辰濃さんでした。名文です。多くの賛同者を得て森が豊かになった1985年、林野庁が知床国有林の伐採計画を発表するのです。1987年、自然保護団体のメンバーが抗議行動を繰り広げている中、林野庁は3日間で530本の伐採を強行しました。私はその様子をテレビで見っていました。衝撃でした。運動って何のためにあるのだろうと空しくなった思いを忘れません。この大きな運動が国の森林政策転換のきっかけになったことを本書で知りました。

地元町長をはじめとする役場職員の知床を守り育てたいというロマンと情熱が胸を熱くします。「知床に原生の森を」という思いが積み重なり、運動は今も発展し続いています。その努力が実って、2005年には世界自然遺産に登録されました。

参加者との交流、特に全国から集まってくる知床自然教室は昨年で30回を向かえたといい、これまでの

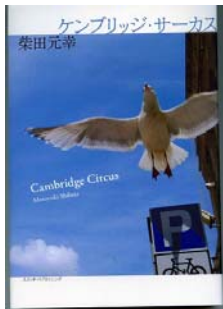


参加者、1514人に圧倒されました。

小学5年生から高校3年まで毎年参加し続けたある女性は知床自然教室の魅力をこう話します。「したことのない経験ができる。電気もガスも水道もないところで暮らすという経験ができる。トイレの穴も自分で掘るし、自分たちでカマドを作り、マキを集め、自分たちで火をおこし、自分たちでご飯を炊く。自分たちで何かをしなければ食べられない。自分たちでやらないと何もはじまらないことを学ぶ。ここに来れば会える友だちができる。見たことのない森や海も見ることができる」。こんな子どもたちが自然を守って行くのだな～と嬉しくなりました。

100年後の「いのちあふれる原生の森」を語る人たちの言葉には力があります。未来を見据えた活動がはじまっているのです。この運動の独自性は開発から森を守るだけでなく、自分たちの手で森を創る事だと筆者は指摘しています。

この本を読んで、甦った知床の森に、是非行きたいなと思いました。



「ケンブリッジ・サーカス」

柴田元幸著 スイッチ・パブリッシング 1800円

オースターの「ガラスの街」やダイベックの「シカゴ育ち」などたくさんの翻訳を手がけ、大学教授でもある著者初めての旅エッセー集です。

生まれ育った東京都大田区六郷では中学時代の自分に出会い、オースターに会いに行ったニューヨークでは互いの子供時代を語り合う。かつて住んだロンドンでは20歳の自分に出会う。米作家のシュアート・ダイベックと京浜工業地帯を歩いた時には少年時

代にタイムスリップ。空間の移動だけでなく、過去と現在を行ったり来たりする時間の旅になっているのです。

少年の日の心象風景と現在がつながっていて、旅って自分と出会うことなんだなと思いました。あとがきに「過去のいろんな自分の姿があたかも自分自身を外側から眺めていたみたいに浮かび上がってくる。そのどれもが、情けなかったり、頼りなかったり、危なっかしかったりする」とありました。何度やっても逆上がりができなくて、途方に暮れた小学生の私がふいに現れて、相変わらず要領悪いねと現在の私を見つめていました。

著者は「未来の自分は想像がつかない。過去の自分というのは、多分、あああれは僕だな、私だなと分かるものだろうという気がする」と書きます。そうそう、よく分かります。

カッコ良くない自分を正直に書けるなんてカッコいいですよ。柴田先生！と親しみがわきました。

「ぼんやりの時間」辰濃和男著 岩波新書 720円

いつも時間に追われ、効率が最優先される現代。ぼんやり過ごす時間の価値が見直されても良いのではないかと著者は急がず、頭を空にして過ごすことの大切さを、串田孫一やソロ一やたくさんの先達の著書の言葉を引き、自らの体験を語ります。

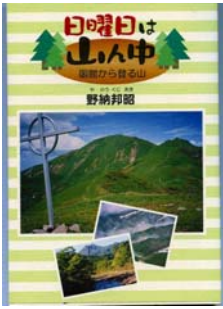
「ぼんやりしているとき、こころは解放されている。こころが解放されていると空は本来の空としてみえてくるし、森の木々は本来の森の木々として見えてくる。風は香りを運んでくるし、巨木にさわればその触感は何百年の命を伝えてくれる。万物の中にとけこんでいる己の小ささも見えてくる」。と著者は書きます。野幌森林公園を歩いていても、ただ歩を進めているときには野鳥は姿をみせてくれません。森に私がとけ込んでいるときは、何故か姿をみせてくれるような気がします。

著者は朝日新聞の記者として活躍後「天声人語」を1975年から88年まで担当。数々の名文を書いた人です。当時は辰濃さんが書いた文章とは知らずに読んでいましたが、特に自然を見つめる確かな目と豊かな表現力はまるでその光景が目浮かぶようでした。

銀河通信でもずっと以前に紹介したアン・モロウ・リンドバーグの「海からの贈り物」にはたくさんの心に残る言葉がありました。「寄せては返す波。松林を吹き抜ける風。砂丘をゆったりとはばたきながら飛んでいく青鷺。そんなものがあわただしい都会の暮らし、時間割や計画のざわめきを消してくれる。そうしてただそこに横になってわたしは波で平らになった浜辺とひとつになる」。「ひとりでいる時間は、一生のうちでも極めて重要な時間である。ある種の原動力は、わたしたちがひとりでいる時にだけ湧いてくる」。と紹介し、著者はぼんやりしながら、自分の内面と向き合っているといい、ぼんやりする時間を持つことで、新鮮な生命力が身内に湧いてくるのを感じると書くのです。串田孫一は、山に登っているときに気に入った一本の木（ミズナラ）の木陰で何時間も過ごしたそうです。

銀河通信の編集が遅れていて、内心はとても焦っていました。でも焦っても言葉は出てこないことに気がつきました。ぼんやり過ごす時間の貴さをこの本は教えてくれました。自然の中に身をおいて思索した著者にはポケットにいっぱい言葉の引き出しがあるんだなあ自分自身の日々の過ごし方を反省させられました。





「日曜日は山ん中」函館から登る山 野納邦昭著 長門出版社 1500円

「メディカルはこだて」に2001年12月から09年10月まで32回にわたって連載した「ドクター野納の山便り」の道南の山々50と北海道新聞道南版に連載した冬山10コースを紹介しています。

野納さんは、北海道の山に憧れて、函館に移住して30年。医師であり、日本山岳会の会員です。地元ではないので知っている山は函館山、大平山、大千軒岳程度です。七ッ岳やピリカ丸山という美しい名前の山。泣面山や毛無山、縫道石山など、想像力をかきたてられる山が簡潔な文章にユーモアを交えて綴られています。

野納さんは同じ山を季節を変えて何度も登るようになったといい、足元のキノコや、登山路の樹木などに興味が向いてきたと書いています。興味が高じて、森林インストラクターの資格も取りました。

ひとりで歩くからこそ味わえる、山の自然の豊かさや変化。登山道から見た森林や地質など自然描写も温かです。道南には日帰りできる知られざるいい山がたくさんあることを伝えてくれます。

厳しい山を必死に登るのもいいけれど、地域の山再発見する魅力があふれていて、機会があったら私も登ってみたいです。

映画

「アイガー北壁」

(独・オーストリア・スイス)
フリップ・シュテルツェル監督

スイスのアイガー北壁は難所で、多くの登山者が挑戦し犠牲になりました。

1936年、ベルリンオリンピックの年、ヒトラーは未踏のアイガー北壁を登頂した者には金メ



ダルを贈ると宣言します。

トニーとアンディが挑戦します。壮絶な登攀がリアルです。垂直の岩壁に取り付く死との格闘。落石や雪崩の恐れなど、一瞬も気は抜けません。そこにオーストリアのナチス党員登山家加わり、一番乗りを競い合います。下山シーンは、登攀技術と体力の全てを使っての懸垂下降。手に汗握り、なんとか無事に下りてと祈るような思いで見つめました。まるでドキュメンタリーかのよう。これらの迫力あるシーンは手持ちカメラで撮影したそうです。

異様だったのは、登攀の様子を高級ホテルの一角で望遠鏡とカメラを構えて見物しているマスコミの残酷さです。登山家たちの安否よりもニュースになるかだけにしか関心を示しません。その理不尽さを映画は告発しています。

登山が国威発揚に利用されたのです。生きていたら、どんな素晴らしいクライマーになっていたことかと、トニーとアンディの無念さが胸をたたきました。



「誰がために」

(デンマーク) オーレ・クリスチャン・マセン監督

ナチス・ドイツ占領下のデンマークで実在した二人のレジスタンスの生き様を描いた物語です。

1944年、地下抵抗組織の二人の男が主人公です。純粋すぎるがゆえに戦うことしか選べなかった23歳のフラメン。愛する妻子を守る

ために身を投じた33歳のシトロン。二人は組織の上司に命じられるままにナチスに協力している同胞を暗殺します。正義感が二人を支えているのですが、あることをきっかけに信念が揺らぎ始めるのです。

フラメンは恋人のケティが二重スパイだと上司から殺すよう命じられます。若いフラメンには信じがたい。組織に対する不信、恋人への疑念、シトロンとの友情。さまざまな感情が葛藤します。

信じていた組織に裏切られた二人のどこにも持っていくような怒りや苦悩をカメラは静かにみつめ寄り添います。シトロンは愛する妻子にも去られてしまいます。取り巻く全てに翻弄されながら、信念を貫いた彼らの姿が痛ましい。

デンマークが当時の資料を公開せず、語ることが許されなかった史実を当時の目撃証言にもとづいて脚本を書き上げ映画化した作品です。

地味な映画でしたが、無名の人々の短い人生を浮き彫りにして余韻が残る映画でした。真実が持つ重みに心揺さぶられました。

山仲間であるganさん(岩村和彦さん)が3冊目の沢のガイド本を出版しました。「北海道の沢登り 独断ガイドブック」2100円です。出たばかりで紹介出来ませんでした。山好きの読者にはチラシを同封しました。是非参考にして楽しい沢登りに挑戦してみたいはかがでしょうか？



「カラヴァッジョ 天才画家の光と影」

(伊・仏・スペイン・独) アンジェロ・ロンゴニー監督
ヴィットリオ・ストラロロ撮影

バロック絵画の先駆者カラヴァッジョ没後400年。その38年の波乱の生涯を描いています。

ミラノで育ったカラヴァッジョ（アレッシオ・ボーニ）は侯爵夫人の援助を得てローマに来ます。極貧暮らしの末にデル・モンテ枢機卿に認められ画家としての地位を高めていきます。娼婦をモデルに聖母像を描く写実的手法は評判になりますが、受け入れられない人も多くいました。ローマの街の風景や酒場の様子が16世紀の雰囲気をも十分に伝えます。

才能はあふれているのに、たびたび激情が引き起こす喧嘩を繰り返し、人をあやめてしまいます。恋多き人であり、信念を曲げないために絶えず協会と衝突しますが、斬新な絵画は人間解放を主張しているかのようで圧倒します。

時代背景が分からなくて、たくさんのエピソードが詰め込まれて理解しにくかったですが、ストラロロの陰影豊かなカメラが素晴らしく、カラヴァッジョの絵画を堪能しました。カラヴァッジョ自身の光と影の二面性もとらえていて、映像そのものが芸術でした。

当時のカトリック教会幹部の退廃。権力を拡大するためにカラヴァッジョを利用しようとする人々。ローマ教皇の選任に関わるフランスとスペインの対立など大きなスケールで描かれています。

「しかしそれだけではない。加藤周一 幽霊と語る」

制作：加藤周一映画制作実行委員会 鎌倉英也監督

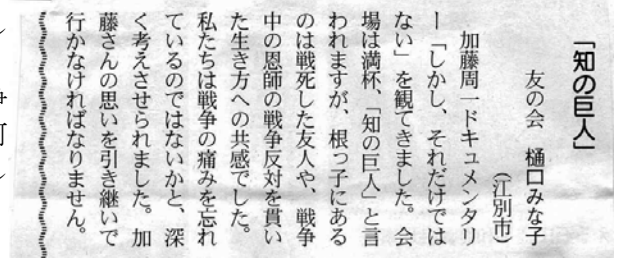
北海道民医連新聞 2010年5月13日

戦後の日本を代表する知識人として発言を続けた加藤周一さんが最後に残したメッセージを、彼自身の歩みとともに構成したドキュメンタリーです。

幽霊と語るとは死者との対話を意味しています。太平洋戦争開戦に熱狂する下界と自己とを隔てる拠り所になったのが世阿弥であり、源実朝に自分との共通性を感じていました。戦死した友人、戦時中も意見を曲げなかった恩師たちへの思いを語りながら、戦争を批判し、平和の尊さを訴えます。「九条の会」の呼びかけ人でもありました。

特に感動的なのは「学生と老人の連帯、精神の協同」を語る東大の学生への講演です。自らも幽霊になってしまった加藤さんから九条を変えてはならないとの平和へのバトンを渡されたような気がしました。

共済ホールでの上映会は5月9日に終わりましたが、6月中旬に蠅座で上映されるようです。是非見逃した方は観てください。



「オーケストラ！」

(仏) ラデュ・ミヘイレアニュ監督

主人公のアンドレイは、かつてはボリショイ交響楽団の天才指揮者でした。ユダヤ人を嫌った頑迷な共産主義者たちに追われ、今はボリショイ劇場で清掃員として働いています。

1枚のFAXが運命を変えます。パリの大劇場から、予定し

た交響楽団が出演できなくなったので、代わりに出て欲しいという文面。アンドレイはボリショイ交響楽団をやめさせられた仲間を集めてパリに乗り込みます。アンドレイはバイオリンソリストとしてフランスで名高いアンヌ・マリー（メラニー・ロラン）をと強く希望します。30年前の解雇と関係がありそうですが、最後まで明かされません。音楽と無縁の生活を送ってきた団員たちの無軌道ぶりにハラハラさせられます。公演前日のリハーサルにも全員がそろいません。ここまでは喜劇タッチでドラマは進みます。

そうして迎えた演奏会当日。曲はドラマティックなチャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲。この曲に秘められた悲しい物語がありました。アンドレイとアンヌ・マリーは演奏を通して互いに会話を交わします。さっぱり音程の合わなかった団員たちは指揮者とアンヌ・マリーの見事な演奏に引っ張られるように素晴らしいハーモニーになります。ソリストがアンヌ・マリーでなければならなかった理由が観る人にやっと分かるのです。アンドレイだけでなく排斥された人たちの尊厳を取り戻した瞬間でした。

泣けます！メラニーが演ずるアンヌが憂いを秘めた美しさで、会ったことのない母に思いを寄せながらヴァイオリンを弾く姿にグッと来ました。

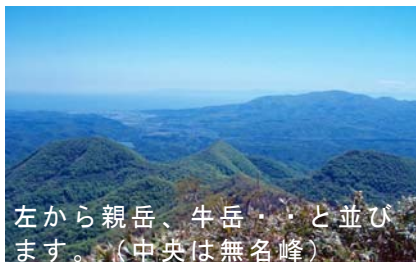
青い海と桜が美しい小樽赤岩



5月15日早朝から、小樽赤岩の西壁正面での岩研修が始まりました。私はまだ岩2回目の（5月5日に初デビュー）初心者ですが、今日は複数のピッチを切って登っていくマルチピッチ。いきなりの挑戦に不安がいっぱい。案の定、最初の壁突破に四苦八苦を強いられました。なんとか切り抜けたら、2つめ3つめは意外とスムーズに登攀でき、ホッとしました。高度感は抜群。青い海と白く輝く増毛連山がくっきりと見え、ピンクの桜とのコントラストがすてきで心が和みました。（左写真・登攀中の私です）



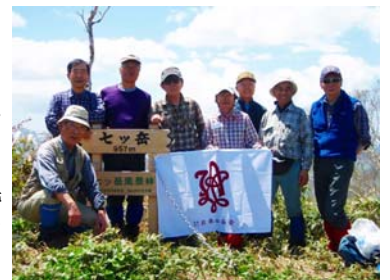
必ず、セルフビレイを行う事の大切さを学び、トップが要所、要所のボルトに掛けたヌンチャクを次に登る人が回収しながら登る技術などたくさんの事を学びました。懇切丁寧に指導して下さったhaseリーダー、また適切なアドバイスをして下さったsimaさん、仲間みなさんに感謝！（撮影は左右共、久我由美さん）



左から親岳、牛岳・・・と並びます。（中央は無名峰）

七つの山の王様七ッ岳

函館の山仲間Uさんのお誘いで快晴の30日、湯ノ岱温泉郷からジープタイプの車2台に乗り換えて18kmの悪路の林道を走り、新しい登山口から七ッ岳に登りました。札幌からの3人を含めメンバーは函館や福島町など地元の人たちとで9人。（私たちは前泊）



上ノ沢右股林道との分岐にゲートがあり営林署の鍵が必要です。上の沢林道から三角錐の美しい七ッ岳が見えます。

登山口9:25出発。西周りコースをゆっくりと登り、ブナ林の稜線には10:00でした。ここから神秘的な七ッ岳大沼が美しい。ニリンソウがいっぱい。ツバメオモト、シラネアオイ、エゾイチゲ、オオバキスミレなどが咲いていました。タケノコが足元にたくさんあり、私も少しだけ頂きました。旧道との分岐には10:40到着。分岐手前では雪が多く、キックステップを切って進むところもありました。頂上には11時半。小さな山なのに眺望は抜群です。大千軒岳や遠く津軽海峡の向こうに岩木山の山影が望めました。七つの山の代表が七ッ岳。大千軒岳を背中に眼下に左から親岳、牛岳、燈明岳、馬岳、少し離れて丸岳、長山と連なり、名前がユニークで民話の世界のようで楽しい。小粒ながらいい山でした。

道南地区のJAC会員との交流も深まり、帰りは大沼公園から端正な駒ヶ岳を望め心に残る2日間でした。

北海道民医連新聞

（毎月第2、第4木曜日発行）

2010年4月22日



4.13江別市民会館で

友の会 樋口みな子
（江別市）
井上ひさしさんが亡くなりました。私たちに生きる喜びを与える笑いを作り出すために大変な努力をした作家です。先日、代表作の1人芝居「化粧」を江別市民会館で観てきました。見えないはずの登場人物たちがまるで目の前にいるかのような舞台に魅了されました。

みんなの
ひろば



た。井上さんもきつと渡辺美佐子さんの演技に満足されたろうと思います。難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを愉快に伝えようとした井上さん。戦争への怒りから、憲法9条を守る運動にもご活躍されました。ありがとうございました。

購読料をありがとうございます。（10.3.25～5.15 敬称略）

倉田修（幌延町）10000円（カンパ含む） 三浦恵美子（旭川市）2000円（カンパ含む） 増子麗子（北見市）1000円 亀田法子（江別市）3000円（カンパ含む） 熊坂政晃（八王子市）2000円（12号分） 河村健（札幌市）1000円 三島春光（札幌市）2000円 伊藤恒雄・牧子（江別市）1000円 神原照子（登別市）1000円と切手10枚 前原満之（宮崎市）1000円 菊地和美（札幌市）3000円（カンパ含む） 加藤多一（長沼町）3000円（カンパ含む） 菅原ノ子（釧路市）1000円 反橋一夫（札幌市）2000円（12号分） 渡辺亜貴子（福島市）3000円（18号分） 清水和男（福島町）1000円 坂井恒俊・京子（旭川市）1000円 世古勇（江別市）80円 切手150枚 合計38000円と切手は印刷、送料に使わせていただきます。ありがとうございました。